

始まりの狐と最後の恋

雪を踏みしめる草履が世界に唯一音を立てている。周りはシンと静まり返っていて、指先は凍るようだった。  
(早く帰りたいわ……)

彼岸花の被衣と狩衣は降る雪によつて白く覆われている。雪が降ると知っていればこんな薄着をしてこなかったのに。銀の髪は寒さに凍りつき、この世にある色味はこの紅い瞳だけなのだろうか。そんな刹那的な寂しさに襲われていると、木の根元に一人の人間が蹲っているのに気付いた。

(人間……かしら。こんな人里離れた所に、なぜ……)

警戒しながら近付いてみるが、男はどうも気を失っているようで、こちらに気付いた様子はなかった。しかも、よく見れば。

(酷い怪我じゃない！ このままでは命を失ってしまうわ！)

「もし、もし！ 貴方、聞こえる？ 目を覚まして！」

慌てて男に駆け寄り、肩を揺すつて声をかけてみるが、冷え切った彼の身体に反応はなかった。

(とりあえず、暖めないと……)

一度周囲を見渡して、人気のない事を確認すると、人間の擬態を解き、妖狐としての姿に立ち戻る。しかし、その見事な銀狐の姿を見る者は今ここにはいないのだった。

「狐火」

現れた蒼く揺らめく炎は男を燃やす事なくその周囲を漂い、彼の体温を徐々に上昇させる。

(傷の手当てもした方がいいわね)

少々迷つた末に、狐火を消さないよう耳や尻尾など一部の部分を狐のまま残し、人型に変化する。薬師として人里に降りていた帰りだったので、ある程度の薬草などを持っていたのは幸いだった。

慣れた手つきで手当てを施す。刀傷が多いので、人同士の小競り合いでもあったのかもしれない。そんな事を考えていた時だった。男が小さく唸りゆつくり瞼を開く。

「！ もし！ お気を確かに！」

慌てて男に声をかける。

「……………」

「え？」

しかし、彼はこちらを見て小さく何かを呟くとまた氣を失つてしまった。  
(と、とりあえずこれで大丈夫なはずだけれど……このままここに居てはまた体が冷えてしまうわね。……家に連れて行つた方がいいかしら)

妖狐であるという事を隠しながら生きている現状を思うと、彼を我が家に連れて行くのは正直よろしくない。しかし、せっかく救つたこの命を無為に絶やすのも躊躇われる。

暫く迷っていたのだが、他に良い方法も思い付かず、仕方なく男を家に連れて行く事にする。

「浮遊」

体格のいい男を担いで行くのは不可能な為、物を浮かせる妖術を使う。人に見られれば非常にまずい事になるが、人気がないことから更に山奥までならなんとかなるだろう。人間の氣配がしたら急いで妖術を解き、完全な人型に化ければ良い。妖狐である自分は人間より遙かに感知能力に長けているのだから、それで間に合う。

サクサクと一人分の足音がする。このままだと完全に日が暮れる頃にはこの足跡も跡形もなく消えているだろう。

パチパチと家の中央に備わる囲炉裏で火が小さく爆せている。雪の止まない外を思わせない暖かさが部屋中に満ちている。

素朴な木の家は入れれば土間と左手に台所。そしてその反対に一間があるだけの小さなものだった。しかも、壁一面に作られた棚には薬草や薬の材料になるもので埋め尽くされていて、一回りは部屋が狭く感じられる。しかし、女一人暮らしていただくなら充分な家なのである。

そんな中に今はふたり。家主である自身と氣を失つたままの男。囲炉裏の炭をつつきながら、男が目覚めるのを待つだけである。

(大分血を失っていたみたいだから、薬湯も用意したけれど、食べられるようなら塩漬け肉も調理した方がいいかしら。駄目なら私が食べてもいいし、塩抜きだけでもしておいた方がいいわよね)

そんな事を思いながら立ち上がった時だった。男が小さく呻き目を覚ました。

「！ 氣が付きましたか?！」

慌てて男に駆け寄ると、男は少し辺りを見渡したものの、状況を理解できていない様子だった。

「はいは……？」

「私の家です。倒れている貴方を見かけてここに連れて来ました」

「あなたが、助けてくれたのか」

「はい」

男が目を覚ました事にほっとしていると、彼がじつと見つめてくる事に気づき、その意図が分からず困惑する。

「あの……?」

男がその手を伸ばすのをただ見つめていると、頬に大きく暖かい掌が添えられたのを感じる。

「……雪の女神」

「え?」

困惑を続けていると、突然腕を強く引かれ、気付けば男の胸に囚われていた。

「なにを……!」

「あなたは雪の女神だ。俺にとつては救いの女神。……どうすれば、あなたは俺のものになる?」

慣れぬ人の体温の温かさと抱き締められる腕の力の強さに、最大の困惑が訪れる。気付けば倒れているのは己で、背中には今まで男が寝ていた寝具がある。そして、眼前は男の姿で埋め尽くされている。

「俺は生きているのだと、これが現実なのだと確かめさせてくれないか?」

「それは……」

顔が火照るのがわかる。心臓が大きく音を立てている。意味は分かるが理解出来ない。なぜ自分相手に?

「抵抗しないのなら、抱く」

「……」

零された直接的な言葉に理解が追い付こうとしている。しかし、抵抗する気が起きないのはなぜなのか、自分で自分がよく分からなかった。

勿論、男の背中に腕を回したその理由も。

【奥付】

タイトル・始まりの狐と最後の恋(サンプル)

著者・咲良椿姫

サークル・Whimsically.

シリーズ・和風あやかし物語

発行日・二〇二二年一月十七日 第五回文学フリマ京都

初出・二〇一八年一月二十一日 第二回文学フリマ京都(コピー本・ここから加筆修正あり)

印刷所・プリントオン様

メールアドレス・[ciel6918@yahoo.co.jp](mailto:ciel6918@yahoo.co.jp)

Twitter・[@Nstda\\_Vitte](https://twitter.com/Nstda_Vitte)

HP・咬み殺すよ?

<http://kamikorosu.chounusubi.com/>

本書の無断転載・複製、オークション・フリマサイトなどでの転売は固く禁止致します。